兄の三味線

仙台市立仙台青陵中等教育学校　一年　堀内　津麦

兄が学校から帰ると、弦をはじく音が聞こえてくる。兄が、祖母からもらった三味線を練習しているのだ。

三味線の皮が破れてしまい、祖母はそのまま引くのをやめてしまった。なんでもやってみたいという兄に「皮を張り替えるなら」と譲ってくれたのだ。祖母に紹介してもらったお店の職人さんは息子さんに代替わりしていた。そこで聞いた話しに私は驚いた。驚いたというよりショックだった。三味線には猫の皮を使うという話は知っていたけれど、猫の皮は大変貴重で高額なため、練習用には犬を使いなさいと言われたのだ。もともと張ってあったのも犬の皮だったとその時初めて知った。我が家には保健所から来た白髪だらけのビーグルがいる。母はすぐに「お願いします」と三味線を預けられずにいた。人工皮革はないのかと聞いたけれど、そこでは扱っていないし、人工皮革は固くて手首を痛めると言われたのだ。母も私も何も言い出せずにいると、職人さんは

「壊れたからと使わないでおいておけばただのガラクタです。直して楽器になるんですよ。」

祖母がなかなか手放せずにいた三味線を私たちは犬の皮で直してもらうことにした。受け取ったとき、うれしさと何とも言えない悲しさが入り交ざり胸が押しつぶされそうになった。

保管の状態が良くないと三味線の皮はすぐに破れてしまう。乾燥しすぎも良くないし、多湿も良くない。こんな繊細な楽器の皮がどこから仕入れているのか無性に気になった私

は、猫皮（よつかわ）や犬皮（けんぴ）を入手している方法を調べて見た。分かったことは、使われている皮のほとんどは、海外からの輸入品だということ。動物愛護の声が高まっている中、犬や猫の皮の確保が難しくな、国産の皮は手に入らない。今でも、十分貴重なこの三味線の皮はいずれ入手が困難になり供給が無くなる。代わりにカンガルーの皮を使っていくとあったが、犬猫はだめでカンガあルーなら良いのか。三味線の皮が全て人工皮革に代わる未来がちらついて見える。

棹は花梨や紫檀などの固い気が使われているがこれも輸入に頼っている。バチはもともとは象牙やべっ甲が使われていたが、言わずもがな、代替品が好まれている。伝統楽器は消えゆくべきなのだろうか。

近所の公園ではサクラ耳のネコや同じ顔ぶれのネコ達がよく昼寝をしている。家に帰れば幸せそうな顔で愛犬がソファで大いびきをかいて寝ている。犬や猫が皮に使われることは好ましく思えなかった。しかし飼っていた犬や猫が亡くなったとき、

「楽器として生きてほしい。」

と、飼い主自らもって来る人もいるという話を聞き、いろんな形の愛があることを知った。

動画を見ては見よう見まねで三味線を弾いていた兄の、不規則でつまづくような三味線の音が、ほんの少し、心地よく聞こえた。それは今回いろいろ調べ、知ったからだろうか。見ると弾きたくなるという受験を控えた兄に変わり、私がしばらくの間三味線を預かることになった。ケースからそっと三味線を出して皮を撫でてみた。たくさん愛された犬であってほしいと、心の底からそう願った。